関西自然保護機構会報（14）1, 1987

巻頭言

暗い時代の自然保護

吉良竜夫
（滋賀県琵琶湖研究所）

日本経済が危機をむかえることはほぼ確実になり、いくらか遠慮ぎみだった開発志向がまた表面に出てきて、自然保護は暗い時代に入ろうとしている。奈良公園のナギの森の伐採、信太の森の公園化、比良山のスキー場拡張など、近畿にも問題の多い開発計画が続出しはじめている。

こうなることは、予測できないわけではなかった。たとえば門司正三教授は、15年前におもしろいグラフを作っている(注)。縦軸には、世界と日本の人口、エネルギー消費量、ＧＮＰ、鉄鋼生産量など、いろいろな成長量が対数めもりでプロットしてあり、横軸は1951年から1970年までの年次である。大部分の量の成長曲線は片対数グラフ上でほぼ直線に近いから、この高度経済成長の最盛期には、生産活動は等比級数（ネズミ算）的にふえていたことがわかる。

おなじ量について世界と日本とをくらべると、日本の値のほうが少ないのは当然だが、成長率をあらわす直線の傾き（こうばい）は日本のほうがずっと大きい。だから、もし両者がそのままの成長率を維持しつづけるなら、遠からず日本の生産量が世界の生産量を追いぬくことになる。もちろん、それは物理的にありえないことだが、かりに対応する世界と日本の２本の直線をそのまま延長して、その交点、すなわち日本が世界を追いぬく時点を求めてみると、偶然にもちょうど現在のあたり―1990年前後―になる！　日本のけたはずれの高度成長が世界のわくに衝突して挫折するのが、今世紀のうちだろうということは、わかりきった見通しだったのである。

この見通しのもとに日本の成長方向をうまく修正しておけなかったのが、だれの責任かはしばらくおくとしても、せっかくの高度成長の結果を、ほんとうに国民の生活をゆたかにし快適な国土をつくるために、うまく使ってこなかったことは明らかである。ここでまた内需拡大ということになると、また公共開発事業のラッシュになりそうだが、また高度成長時代のくりかえしをやるのなら意味はない。開発そのものは必要なことで、それ自体は悪いことではないが、これまで日本がやってきたのは、地価の抑制とか過密都市の再開発といった、困難だが基本的に重要なことを回避して、抵抗の少ない田園地帯や山野に無秩序に開発の手をひろげ，国土の環境・居住性・景観などをめちゃめちゃにすることだったからである。

いまからでもおそくはない，逆の方向への切りかえが必要である。そうしなければ，日本の経済的基盤はほんとうに強固なものとはならないだろうし，また戦後日本の発展が文明史的に評価されることもないだろう。

一方，高度経済成長の暗黒面としてあらわれてきた環境問題は，局地的な公害事件からはじまってしだいに認識の規模をひろげ，グローバルな環境変化が真剣に心配されるようになってきた。この段階で，自然の利用と保全について環境科学者たちが到達した結論は，つぎの２点につきる。

１）地球上には，少なくとも現存するのとあまり変わらない程度の量の自然生態系を，その機能が失われることのないよう保全し，人間系（文明系）とバランスを保って共存させねばならない。

２）自然生態系の利用は，その本来の機能とくに環境調節機能を低下させない程度の利用―いわゆる持続的利用（sustaining use）―にとどめるべきである。

グローバルな自然保護といえば，とかく熱帯林のような開発途上国の自然が問題にされるけれども，公平の原則からいって，工業化諸国もおなじ努力をはらうのでなければ，途上国に対して対策を要請することはできない。

さきにのべた日本の高度経済成長期への反省とあわせて考えると，われわれのとるべき道ははっきりしているように思う。それは，“開発イコール文明系の空間的拡大”という考えをやめることである。開発にあたっては，自然の破壊を最小にし，こわさずにすむものはどんな小さな自然でも残す。むしろ，もう自然はこわさない，というくらいの決心をするほうがよい。そして，開発の方向を，いまある文明系空間の内部を高度化し，もっと効率的に利用するほうに向けるべきである。日本の場合には，それが同時にわれわれの生活をゆたかにし，環境のアメニティを高め，ウサギ小屋から人間らしい住居にうつることにつながるはずである。

予想される自然保護の暗い時代のなかで，このことをうったえてゆきたい。

〔注〕門司正三（1972）植物生態学講義雑記。生態学講座月報，１：１－３（共立出版）。